イギリスと日本のペット事情

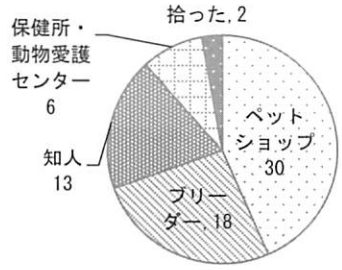
２年６組　庄　嶋　菜　月
２年９組　廣　瀬　梨　早

１．テーマ設定の理由

日本ではペットブームの到来により、ペットがとても身近な存在となっている。実際に、現在日本のペットの個体数は2200万で、15歳未満の子供の数より500万多いというデータもある。しかし、簡単に手に入るからこそ捨てられるペットも多く、殺処分などが深刻な問題となっている。日本の動物愛護は、世界的に見ても100年遅れていると言われている。一方、イギリスは200年にわたり動物愛護に取り組んでいる歴史があり、国民にも深く理解されている。そこで、動物愛護国として知られるイギリスのペットに対する考え方や取り組みについて調査し、日本の動物愛護の現状改善に役立てる方策を見出すために、このテーマを設定した。

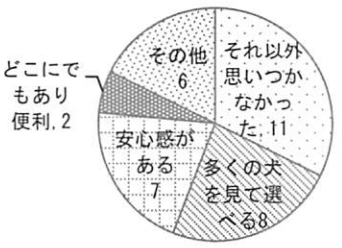
２．調査結果・考察

図ａ．犬をどこで（どのように）手に入れたか［単位：人］



回答者：福岡高校２年生で犬を飼っている人

図ｂ．なぜペットショップで買うことに決めたか［単位：人］



回答者：福岡高校２年生でペットショップで犬を買った人

実施：2015年６月
対象者：福岡高校２年生約370名

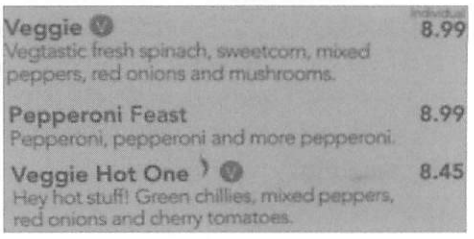
①　ペットの購入について…図ａを見ると、ペットショップで購入する人が高い割合を占めている。実際、日本では犬や猫を購入する人の70%がペットショップに行くと言われている。図ｂを見ても分かるように、ペットショップでの購入には様々な利点がある。しかし、それは動物にとっては良い環境とは言えないという実情は、あまり知られていない。多くのペットショップで販売される動物は、生まれて４週間も経たないうちに家族から引き離され、生体オークションにかけられる。そしてショップに着いてからは、ショーウィンドウの中で朝から晩まで照明で照らされる。現在は犬猫の夜間展示は禁止されたが、動物にとって不適切な環境であることには変わりない。また日本では、イギリスと異なり飼い主の適性検査がないため、誰でも簡単に購入することが可能だ。ホストファミリーや交流した学生の方に日本のペットショップの写真を見せ説明すると、多くの人がショックを受け、怒りを覚えると言う人もいた。イギリスには犬猫用のペットショップは存在せず、餌やおもちゃが販売されるだけだそうだ。魚やハムスターなどの小動物はペットショップで販売されるが、それらに関しても現在では規制が厳しくなってきている。イギリスでは、犬や猫などのペットを飼う時は動物愛護団体や知人から譲渡してもらうのが一般的である。これは、日本とイギリスのペット事情の違いの中でも、最も大きな違いの一つと言えるだろう。

②　動物愛護団体…イギリスには大規模な動物愛護団体が数多く存在しているが、その中でも最も大きな団体として「ＲＳＰＣＡ」がある。「ＲＳＰＣＡ」とは、Royal Society for Prevention of Cruelty Animal（英国王立動物虐待防止協会）の略である。この協会は、世界最大かつ最古の動物福祉団体で、動物虐待の防止と動物への優しさがある社会づくりを目指している。ＲＳＰＣＡをはじめとする動物愛護団体の活動は、アニマルセンター・アニマルクリニックの運営、募金活動、里親探し、動物虐待等の通報に対する対応などである。テレビ番組やＣＭ、チャリティショップを展開しているため、イギリスではＲＳＰＣＡを知らない人はいないというほど有名であり、イギリスの大学生の方、ホストファミリー、学校訪問で訪れたチャーウェルスクールの学生に「ＲＳＰＣＡを知っていますか。」と尋ねると、全員が「Yes」と答えた。日本にもＲＳＰＣＡに類似した団体はあるが、イギリスのように国営のものはなく、ほとんどが小規模である。また、そのような団体の存在を知らないという人も多い。動物愛護について調査するにあたり、私たち二人は日本のある動物愛護管理センターを訪れた。そこでは、犬猫の引き取りや譲渡、動物ふれあい事業など様々なことを行っていた。日本の課題となっている殺処分についてセンターの方に尋ねたところ、以前は動物たちを閉じ込めた部屋にガスで充満させて窒息死させるという方法が取られていたが、現

在では薬を注射するという、できる限り安楽死に近い方法に切り替わっているそうだ。またセンターに引き渡すのを考え直すよう、センター職員が飼い主を説得する取り組みもあり、収容や殺処分される動物の数は減ってきている。しかし、現在でもそのセンターでは年間に収容された犬の約15%、猫80%が殺処分されているのだそうだ。センターにペットを引き渡す理由は、吠えてうるさい、病気・高齢になったなどあまりにも身勝手なものが多い。ペットは物ではない。飼い主はきちんと責任をもち、終生飼育を決意して飼う必要がある。

③ その他のイギリスのペット事情

・VegetarianとVegan…イギリスでは日本よりベジタリアンが多く、レストランには「V」と書かれたベジタリアン向けメニューがあった。ビーガンとは、乳製品や卵などを含む動物性食品を全く食べず、動物製品も身に着けない人を意味する言葉で、イギリスでうまれた言葉である。ベジタリアンやビーガンになる理由は、健康上や、宗教上の理由など様々だが、中には動物を愛するが故に、という人もいる。



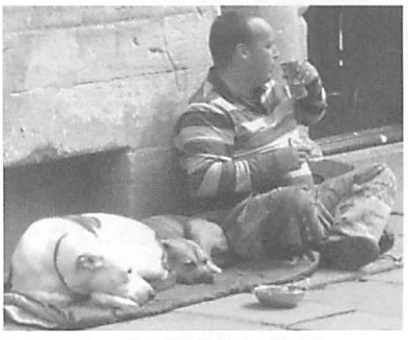
レストランのメニュー

・Sea gull…バースには海カモメが多く、ごみを散らかしたり鳴き声がうるさかったりと、住人には好かれていなかった。しかし法律で保護されており、傷つけると逮捕されるため、上手く対策が取られていた。下はバースの町にあったごみ箱で、カモメに荒らされないよう蓋がついており、「カモメに餌を与えないでください」と書いてある。人とカモメが共存を目指す素晴らしい取り組みだと思った。

・ホームレスのペット…イギリスでは、ペットを飼うホームレスには餌代として毎月一定額が税金から支給される。そのため、ホームレスでも毛並みの良い犬を連れている人が多かった。

犬専用のごみ箱

バースの町の蓋付きごみ箱


ホームレスとそのペット

④ イギリス動物愛護の歴史

日本の動物愛護は世界的に見ても100年遅れていると言われている。一方、イギリスの動物愛護の歴史は200年に上り、国民にも深く理解されている。確かに、現地で出会った人々に動物愛護に関する質問をすると、誰もが即座に自分の意見を話してくれた。本当に多くの人が動物愛護の精神を持っていることに驚かされた。では、イギリスではいつからこのように動物愛護が盛んになったのだろうか。以下はその歴史をまとめたものである。

1700年代	「世界は人間のために存在している。ほかの動物は人間の従属なので好きにしてよい」という考えが広くあり家畜動物への虐待が横行していた。
1800年代	ジェレミー・ベンサムが「動物も苦痛を感じる」と主張。
1824年	動物虐待防止協会の設立（世界最古の動物愛護団体で現在のＲＳＰＣＡ）
1911年	動物保護法の制定
1951年	ペット動物法の制定（ペットショップを規制）
2006年	動物福祉法の制定（人間は動物に対して責任を持つ）

このように、長い動物愛護の歴史をもつイギリスでも、初めからその愛護の精神が高かった訳ではなく、長い時間をかけて変化し、現在のように国民にも広まっていったのである。日本は動物愛護に関しては後進国だが、動物愛護に関する法律が増えるなど少しずつ動物愛護の意識は高まりつつある。先ほど述べた犬猫の夜間展示禁止の条例も改善の一つである。また、地方自治体による野良猫への対応や、地域ごとの動物愛護センターによる殺処分を減らす取り組みなども進められている。

3．感想

今回イギリスと日本のペット事情について調べて、動物と私たち人間とが共存するためには国の政策や法律の整備だけではなく、それに加えて個人の意識改革との両方が必要であると感じた。法律だけが整備されても、実際に行動する私たち一人一人が動物・ペットに対する正しい認識を持っていなければ何も変わらない。法律面からみても、人々の意識面からみてもイギリスは動物愛護国だ。特に驚いたのは、動物愛護の精神がイギリス国民に本当に深く理解されていることだ。交流した人に動物愛護に関する質問をすると、誰もが即座に自分の考えを話してくれた。日本でも近年動物愛護の精神に則った法律が増えてきている。政策・法律面が整いつつある今、人と動物との共存に必要とされているのは私たち一人ひとりの意識改革である。終生飼育はもちろんのこと、動物を飼っていない人でも募金や動物愛護管理センター等のボランティア活動に参加するなど出来ることはたくさんある。一人ひとりが動物愛護の精神を持ち、それを行動に移していくことが人と動物との共存、ひいては世界の人々と自然との共存につながっていくのではないだろうか。

出典：ジャパンタイムズ（2013年２月19日）、http://goron.co/archives/1304
藤村晃子「ペット大国日本の責任！－いのちが教えてくれたこと」